

聖霊論によって説教を基礎づけるということには、ひとつの補足的説明を必要とする。この説明が明らかにするのは、み言葉を与える霊は、何かひとつの霊というのではなく、聖なる霊なのだということである。同時にまたこの補足的説明が、なさなければならないのは、霊の中に根ざす説教の権利根拠を、霊の多様性や隠蔽性の中から明るみへ出すということでもあるのである。説教は、自分が宣べ伝える方のみ名の中に、その権利根拠を有するのである。

第五章 名

参考文献

- オスカー・グレーター『旧約聖書における神の名と言葉』Oskar Grether, Name und Wort Gottes im Alten Testament, 一九三四年。
- ハンス・ビーテンハルト『聖書における神の名』アルバート・シェーデリン記念論文集『み言葉をこそ立たしめよ』Hans Bietenhard, Der Name Gottes in der Bibel, in: Das Wort sie sollen lassen stahn, Festschrift Albert Schädlein, 一九五〇年。
- 同、『新約聖書神学辞典』の名 (bypna) の項、第V巻、二四二ページ以下。
- ヘルムート・ロージン『主は神なり。神のみ名の翻訳と教会の伝道』Helmut Rosin, The Lord is God. The translation of the divine names and the missionary calling of the Church, 一九五六年。
- コルネリス・H・シスロンテ『神々の沈黙と神』Kornelis H. Miskotte, Wenn die Götter schweigen, 一九六三年、一二七ページ以下。
- ヴァルター・ツインメルリ「わたしは主なる神」『神の啓示』所収、神学双書第一九巻。Walther Zimmerli, Ich bin

- Jahwe, in: Gottes Offenbarung, Thb 19, 一九六三年、一一ページ以下。
- オイゲン・ローゼンシュトック・ヒェンシー『人類の言葉』Eugen Rosenstock-Huessy, Die Sprache des Menschen, geschichts, 第一巻、第二巻、一九六三年。
- ユルゲン・モルターマン『神の言葉と言語』『神学の展望』所収。Jürgen Moltmann, Wort Gottes und Sprache, in: Perspektiven der Theologie, 一九六八年、九三ページ以下。

第一節 み名による説教の正当化

この部分でなされるべきことは、今まで述べてきたことをより厳密にし、敷衍することである。聖霊に続いて、説教の根拠として、なぜ名があげられるのかということの根拠を挙げるには、これまでのことを短く要約するのが適当であろう。聖霊は、多様な仕方でも、もろもろの国の上にただよい、無数の国語、方言によって、み言葉を、もろもろの言葉を与える。個別的な、また集合的精神に、自身を混ぜ合わせられ、個体からも集合体からも語られる。み言葉に仕える者は、聖霊がみ言葉を与えるその多様性に注目しなければならない。その多様性が隠された仕方で行なわれることを看過することはゆるされない。「今日、聖霊の力、あるいはキリストの言葉は、この世から小部屋の中へと働きかける」。このクリストフ・ブルームハルトの言葉は、その小部屋から再び出て、しかも、もろもろの壁をもつらぬく力を持つ言葉を説教者が見いだそうとする時、成就するにちがいない。教会が、自分を取り囲み、包みこんでしまっているような沈黙を打ち破ろうとするならば、多様な霊の中で聖霊が語っているのを聞きとらなければならない。そして教会と共に説教者たちもまた、この世のための言葉を見いだすのは、彼らもまた、聖霊が語っている事柄を、この世から聞きとるための心備えをしている時だけなのである。しかし、その場合、その「小部屋」の中に、ひとつの法廷が存在しなければならない。それは多様な声の中か

らひとつの声を聞きわけ、多様な意味の中からひとつの意味を聞きとる法廷、つまり、どのような霊が囁くどのようなことでも真実と思ってしまうことのないような、批判の法廷が存在しなければならぬのである。この法廷は、多様な語り方を単純なひとつのものに集約する能力を持たなければならない。聖霊がもろもろの霊と共に入りこんでいる個別的また集合的混合状態から、ひとつの霊がいれば、もう一度蒸溜されなければならない。この法廷は、聖霊の多様な言葉を、ただひとつの霊がそこから出て来た方へ還元させなければならないのである。聖霊がみ言葉を与えるのであり、しかも、み霊そのものが正当化される必要があるとすれば、聖霊についての判断を問う問いが、説教の正当性を問う問いと平行していかなければならないのである。われわれが何を根拠に説教するのか、われわれがこの世に向けて——そしてこの世の中にある教会に向けて——語る言葉をどこから得てくるのかということが、もろもろの言葉において、なおよく言えば、ひとことで、明らかにされる必要があるであらう。

説教とはみ名によって語ることである。説教は、父と子と聖霊との名によってなされ、そこに存立する。説教はみ名のうちにその支えも内容も得る。み名が説教をはかる基準の尺度を形成する。み名は、一方において、聖霊とその言葉の由来を指し示し、他方において、そこで名を呼ばれている方の来臨と答えをひきよせるものなるがゆえに、説教を正当化し、これに力を与えるのである。

われわれは、もちろん、この説教の正当化ということを、更に別の根拠によって基礎づけることも可能である。その場合、この別のところからというのは、名と対立関係に立つ必要はない。逆に、正しく理解するならば、この他の仕方による根拠づけは、み名から導出するということの説明になるのである。そうした根拠づけのうちの五つをここで挙げよう。そこで、これまで述べてきたことや、これから述べられるはずのものに言及するかもしれない。ここで明瞭に注意しておきたいことは、ここで五つのことを挙げるのは完璧を期してのことではないということである。聖書による正当化を挙げ

ていないのは、それが理論的帰結としてみ名による言葉ということからひき出されるものであり、このあとの部分で論じられ、展開されるはずだからである。

- 1、説教は、その正当性を、教会の公同性と伝統との一致のうちに見いだす。
- 2、教職の職務による説教の正当化。この見解の正しさは、説教が使命の委託を受けなければならないという点にある。わたしは、自分勝手に説教するということではできないのである。
- 3、説教する（そしてまた説教を聞く）主体による正当化は、近代プロテスタント主義においては、多様な形をとって変転してきた、説教の權威証明の試みである。公同性に代わって説教者個人が登場してくるのであり、それが、それ自身で説教を正当化するのである。
- 4、学による説教の正当化は、その神学的正当性を、学が霊に仕えるという点に持っている。学による正当化を拒否することは、神学を拒否することと同じ意味を持つであらうし、学的な世界において、説教がこの世に対して無縁なものとなり、説教そのものを愚鈍なものにするということになるであらう。
- 5、聞くということから説教を正当化するという点においては、説教がみ言葉の将来の視点から、考察されるのである。

以上素描した説教確保のこころみに対して、わたしは、名を持ち出すのであるが、この名ということで言いたいののは、説教にとってひとつの真理契機とか、ひとつの正当化の道というのではなくて、端的に、説教の正当化そのもの、真理そのものなのである。いっさいはここで決せられるのである。説教の力もその無力も、その真理も通ちもここに決せられる。「父と子と聖霊の名によってなされることのない説教は、決してキリスト教的説教と呼ぶことはできない」という発言は、形式主義的ではなく、むしろ厳密に内容的に理解されなければならない。他の仕方によって説教を正当化すると、このような発言をすることはできない。たとえば、ひとつの預言者的説教は、反伝統的であることがありうるし、外的召命なくしてもなされうるし、あらゆる学を拒否することも

ありうるのである。ある説教が信仰なくして語られることや、聴衆を全く無視することもありうる。そういう説教はおそらく悪い説教であろう。いずれにせよ、論争的に、「非キリスト教的」と呼ぶことはできよう。キリスト教的説教の退落態として、しかし、それはやはりキリスト教的説教でしかない。ただし、この説教が他者の名でなされるとすると、それはキリスト教的ならざる説教であろう。説教は名によって検証することができる。そこで前提されることは、この名が何を語っているのかを、わきまえているということである。

ひとつの説教の枠の中で、この三つの最高名を解き明かすのがこの課題とはなりえない——それは教義学の任務なのである——だがしかし、説教にとってこの名の意味するところが何であるかを説明する必要はあるであろう。

まず最初に旧約的にこれを言い表わしてみたいのであるが、それだけでやはり、われわれの考慮を促すことになる。この旧約的な言い表わし方は、三一論によって理解されることを求める。それ自身が三一論に呼応しているのである。三一の神の名による説教は、ヤーウエの名による言葉であるといえよう。もとよりわれわれはヤーウエの神を説教する必要はない。キリストを説けばよいのである。しかし、ヤーウエについて語ることによってのみ、キリストを説くことができる。その限り、名による言葉としての説教は、ヤーウエの名による言葉であるということとは妥当するのである（以下の叙述において、特に第六章第V節を参照のこと）。

すべての人々を支配しているように思われるマルキオン主義⁽²⁷⁾に対して、まず強調されなければならないことは、ヤーウエとは、その方なくしてはイエス・キリストの存在しようがなかったであろう神のことだということである。それゆえにわれわれは、ヤーウエについて語ることなくしては、イエスについても語り得ないのである！この統一関係を本気で承認しようとするなら、神をひき裂き、一種のグノーシス⁽²⁸⁾的二神論を構成してしまう

ことになる。キリストについての説教を、ヤーウエから引き離してしまうならば、「父と子と聖霊の名によって」語ってはいないのである。キリストについての説教なるがゆえに、み名による言葉としてのわれわれの説教は、ヤーウエの説教でなければならないのである！ヤーウエから切り離されたイエスは非現実的になってしまい、単なるイエス像になってしまうのである。しかし、「ヤーウエによって語る」という表現は、いかなることを意味するのである。

ヘルムート・ロージンおよびホルネーリス・H・ミスコッテは（二二一ページ）、「ヤーウエが神であられる」というこのつながりを逆転することはできない、というテーゼを主張している。「ヤーウエ」の名によって示されている主が、「神」という客語を支えているのである。つまり、神がただ単にヤーウエの名を持っているのではない。名はつけ加えられたものではなく、神に固有のものである。ヤーウエが神であられるのである。ヤーウエの名は、人間が発明して、考え出したようなものではなく、ご自身の本質の表現なのである。——「シエム、すなわち名というヘブル語が、神の名として用いられる場合に、それは、人格としての神を示している。つまり、その総体における神に関わるのである」（「グレート」、一六九ページ）。「名は、いわば神の人格の精髓、その力にない手である」（ゴットフリート・クヴェル、新約聖書神学辞典、第三巻、一〇六八ページ）。ヴァルター・ツィンメルは「自己紹介の形式」というものについて語っている（二二一ページ以下）。その中に神の啓示行為全体が凝縮しているのである。「ヤーウエがご自身の民に語り、告知されるべきいっさいのものが、わたしはヤーウエである」という基礎的発言の展開として現われてくるのである」（二〇二ページ）。

カール・バルトは、啓示の決定的な行為を、神のみ名の啓示の中に見ている（教義学第一巻第一分冊、三三五ページ）。そうすると、名によって語ることをしての説教の持つ意味は、そこでわれわれが名をもって呼ぶ方とは、ご自分でご自分を紹介する方であり、そのみ名によってご自身を示す方であり、ご自身の名を犠牲にするとご自身をも危くしてしまうような方だということである。新約聖書においては、イエスの名が、ヤーウエの名に代わって、啓示の総体として登場してくる（「グレート」、一八三ページ、教会教義学第一巻第二分冊、一一一ページ参照）。イエスには、すべての名にまさる名が与えられる（「ピリピ」二・九以下）。イエスにおいてヤーウエの顕現があったのである。イエスのみわざは、名を

告げられることであつた。「わたしは彼らに御名を知らせました。またこれからも知らせましょう」(ヨハネ一七・二六)。ここで注目すべきものは時である。み名は告げられた。確かめられた。そして、同時にそれは約束にとどまる。時は、このみ名のうちに凝縮する。そしてみ名を告げる行為と共にヤーウエご自身がここにおられる。「わたしと父とはひとつである」(一〇・三〇)。

み名による言葉としての説教はヤーウエについての言葉である、というわれわれの命題は、ここからもう一度読み直さなければならぬ！ 説教がそのようなものであるのは、キリストについての説教、キリストについて人格的に語る言葉としてののである。パウロは、異邦人の間にあつて「彼」を説教する(ガラテヤ一・一六)。パウロの使徒的説教の内容は、十字架につけられたキリストである(第一コリント一・二三)。だがそこで考慮されるべきことは、この十字架につけられた方が、将来の方として説教されるということである。エドゥアルト・シェヴァイツァーは、原始キリスト教の説教について、次のような判断をしている。「言教の唯一の内容はイエス・キリストである。これは厳密な意味でそうだったのである」(「イエスとそれに従ひし人々における謙卑と高擧」*Erniedrigung und Erhöhung bei Jesus und seinen Nachfolgern*, 一九五五年、一〇七ページ)。マルティン・ルターが「キリスト以外に説教されるべきものは何ものもない」と宣言する時(ヴァイマル版全集第一六巻、一二三ページ)、この新約聖書の事態を受け入れたのである。

この「キリスト以外に何ものもない」ということによって、ヤーウエが解消されたわけではない。そうではなくてヤーウエに栄光が帰せられたのである。キリストを説教するとは、ヤーウエについて語ることなのである。ヤーウエがイエスを死人の中から甦えられたからである。ヤーウエを否認する者は、イエスを死人の中から甦えられた方を否定するがゆえに、復活をも否認するのである。多くの復活の説教に、ありそうもないこと、非現実的なものの香りがこびりついているのは、ヤーウエを忘れているところに根拠があるであらう。この場合に復活が否認されているのは、復活そのものを問題視しているということにあるのではなく、これを孤立させたという点にあるのである。

このような説教のもたらす政治的、帰結を想像するのに、それほどの想像力を必要とはしない。ひそかに、あからさまに淵源をきわめた、キリスト教説教におけるマルキオン主義が、キリスト教的反ユダヤ主義を可能にしたのである。ユダヤ人の神がイエスを死から甦れ戻してくださったことを忘れたことによって、イエスの死に対する責任をユダヤ人に負わせてしまったのである。ヤーウエを忘れたことによって、自分たちがイエスを通じてユダヤ人と共にヤーウエのものであることを忘れたのである。このことによって示唆されているのは、み名による言葉としての説教は、根拠を定めるのみならず、将来を規定するということである。

以上の叙述をふりかえると、説教はみ名による言葉であり、三一の神の名によって行なわれ、そこに成り立つのだとのわれわれの最初のテーゼをより厳密にすることができる。説教は、自己の正当性の根拠を、ヤーウエとイエスの名のうちに見いだすのである。もろもろの霊のうちにあつて、さまざまな声となつて聞こえてくるものも、このふたつの名にもとづいて聞き取り、その由来を尋ねなければならないのである。説教の発言そのものが、この名を問いかえしていくということによって、その責任をになつていくようなものでなければならぬのである。もろもろの霊の検証が、ヤーウエとイエスのみ名への還元として行なわれるとすれば、それによって、聖霊はみ父とみ子より出するという古い教理が受け入れられているわけである。わたしが聖書の言葉を用いてみ父とみ子と、その霊について語るとすれば、それはすなわち、父と子と聖霊について教義の言葉をもって語ることなのである。同時に、単数の名と複数とについて語るとするのは、三一論の教えにふさわしい。神は、おひとりなるがゆえに、ひとつの名を持つ。神は父と子と聖霊において自己を啓示なさるがゆえに、三つの名を持つ。神はひとりにして、しかも三つの名によって自己を啓示なさるがゆえに、説教は自己の批判的原理を、ひとつの名と複数の名のうちに持つのである。

み名による説教の正当化ということが示唆するのは、説教を正当化するのには、神ご自身でなければならぬというものである——そうでなければ、説教の奇跡なるものも計算可能で、作り出しうるものであることになってしまうのである。説教者として、私は、自分の説教を自分で証明することも、正当とすることもできない。説教は自ら明瞭でなければならぬ。だがこの明瞭さは、み名の持つ明瞭さと共に立ちもし、倒れもする。この名は、その名づけた方によって明瞭となる。すなわち、名づける者によって名が聖化されるによる。いずれにせよ、ここで名が呼ばれている方がそこにおられるということになる。なぜならば名に、その名で呼ばれる者の属するごとく、名はまたその呼ばれる者に属しているのである。名と、呼ばれる者とは、相互に関連しあっている。アブラハム・カルフ Abraham Calov は *Nomen Dei est Deus ipse* (神のみ名は神ご自身である) と言いつづけている。み名による説教の正当化は、名とその名で呼ばれる者の同一性に依存している。この同一性は、説教の大問題であって、他のいっさいの問題は、これに比べれば児戯にひとしい。神は、われわれが神について語る言葉の中で神であり続けるべきなのである。

説教の焦眉の問題は、人間が聞くか聞かないかではなくて、神がそこにおられるかおられないかということであり、それゆえに、神のみ名を呼ぶということなのである。

このことによって指し示されたのは、神がご自身でみ名を力あるものにしてくださるという期待の地平である。その場合には、一本のマツチのように捨てられたひとことが森全体に火をつけてしまうことも起こりうる。そのようにわれわれの説教が目指すのは、名と、その名で呼ばれている者の再結合である。この再結合が起こる時、われわれの説教は無効ではなくなる。名を呼ばれる方が、その名を呼ぶことの中に臨在しておられるならば、説教者は自分に何も言ってくれないとは、いかなる聴衆も言い得なくなるであろう (第二章参照)。そこにおられる方は、すでにわれわれのため、わたしのためにここにおられるからである。そしてこの方が、われわれのため

にここにおられるのは、その方が全世界のためにここにおられるからなのである。

このような理由から、わたしは、このヤーウエについて語ることを、ないしはみ名による言葉の概念を、いわゆる「ケリニグマ的集中」(kerygmatische Konzentration) の概念に並列せしめたいと思う。この概念を、まことに実り多い仕方で取り出してくれたのは、カトリックの説教学者たちである。ヨハンネス・リース Johannes Ries は、この言葉の課題をこのように描写している。「説教を聞く者は、その実存のただ中において、啓示の中心そのものによって打たれ、もはや逃れることが不能なほどに責務を負わされるべきである。宣教の中心そのものの中に置かれるべきなのである。そしてやはりそれは、イエス・キリストにおける、その言葉とわざとにおける啓示の全体、啓示の現実が、彼の実存根拠、また実存の場所として、内容豊かに提供せられ、その啓示の豊かさよりする責任ある生活が、その生きざまとして、いきいきと示されるようではないのである」『説教の危機と革新』Krisis und Erneuerung der Predigt, 一九六一年、一九三ページ以下)。「ケリニグマ的集中」を彼は次のように定義している。「福音の使信及びその現実化へと人間を束縛し、責務を負わせる使信の特質を、宣教の中心からして、宣教にふさわしい仕方であらうこれを総括し、現実的に表現し、それによって、明瞭な、人に確信を与え、その心を捕らえる仕方で言い表わすことを目指すこと」(一九五ページ以下)。あとの方では、「イエス・キリストは主なり」(ピリピ二・一一)という使徒に発する表現が、印象深く指し示されている(リース、前掲書、二二二ページ参照)。わたしはこの告白的表現から、名ということに戻っていくことによって、名というものの持つ、言葉の上での適切さを強調したい。み名を呼ぶということの中に、すでに、ケリニグマ的集中という概念で言われていたことが、凝縮して述べられているのである。

第Ⅱ節 解釈学的問題としての名

名と人格との一体性ということから第一に帰結せられることは、名の翻訳不能ということである。「ヤーウエ」は翻訳不能の名であり、概念化できぬ概念である(ミスコッテ、前掲書、一三四ページ)。ヤーウエが訳し得な

いのと同じように、イエス・キリストの名も翻訳不能である。「イエス」にせよ、「キリスト」にせよ、この名は新約聖書の文書のすべてに登場してきている！新約文書の著者たちは、その個々におけるさまざまな相違にもかかわらず、この名を呼ぶことにおいては一致しているのである。お互いにどのように違った議論をしている場合にも、この一致は看過し得ないのである。み名の翻訳不能ということは、それなりにその帰結を生む。名は交換できない。それは一回的、唯一独特のものであり、それゆえに訳し得ないのである。ヤーウエのみ名が交換できるとすれば、第一の戒めは無意味になってしまふであらう。「わたしはあなたの神、主である。……あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」(出エジプト記二〇・二以下)。神と神々との間を区別することが、もはや不可能になってしまふであらう。だが神は神々と取り違えられてはならないがゆえに、そのみ名もまた交換可能ではあり得ないのである。——み名の翻訳不能ということが象徴していることは、更に、ここで呼ばれている方と、その名の自立的存在、その聖性である。み名は、訳されることによって、偽りのものにされ、裏切られることがあつてはならない。したがって、名の翻訳不能ということは、神について語ることのすべての前提をなすことに変わりはないのである。この翻訳不能は、み名が交換不能だということを指し示すと言つてよいのである。

翻訳不能の名を拒否してしまふような説教は、その名を呼ばぬままにしておくことは可能であるから、その限り実際に行なうこともあり得よう。しかし、原則的には不可能なものである。翻訳不能、交換不能な名は、なくてはすまずわけにはいかないのである。この名を抜きにしては、神について共通の了解をすることが不可能であるのとひとしく、神の理解そのものも不可能であらう。

この交換不能の問題との関連で、ペーター・ビクセル Peter Bickel の「机は机」(Ein Tisch ist ein Tisch)という物語は参照するに値するであらう。この物語は、一方においては、神のみ名の持つ意義は、他の名まえにとつてどれほ

どの帰結を生むかを明らかにすると共に、他方においては、われわれの問題を説明する比喩ともなるであらう。この物語の主人公は「ひとりの老人」である。「この老人がどういう人か描写するのは意味がない。他の人間とほとんど変わるところはないのである」。しかし、ただひとつの相違がある。「今やすべてのものが新しくされるべきだ」との彼の願望、彼の思想が満たされなかったため、「大いなる怒り」が彼を捕らえた。自分の机が気に入らなくなった。部屋の中の何もかもが気に入らなくなり始めた。そこで彼は、ベッドを「絵」と呼び、絵のことを「机」と呼ぶように、名を取りかえてしまふ決心をした。言葉を変えるのは、はじめは楽しかった。そうやって、「全く自分だけの新しい言語」を作り出してしまった。人々が語るのを聞くと、「彼は笑わ」ずにおられなかった。「すべて理解することができなかったからである。しかしこのお話は、そんなに愉快なものではない」。

老人は人々の語ることをもはや理解しなかった。

もっと悪いことに、人々も彼をもはや理解することができなかった。

そこでもう口をきかなくなった。

沈黙してしまつた。

あいさつをすることもなくなつてしまつた『子どものためのお話』Kindergeschichten, 一九六九年、二二ページ以下)。

人間相互における理解が、名と言葉の交換不能ということに、これほど依存しているとすれば、神についての理解の可能性は、どれほど、そのみ名の交換不能ということに依存していることであらうか。み名による言葉としての説教は、——たとえて言えば——その人となりを描写する値もない人に、「机は机」と言つてあげるといふ課題以外の何ものも持たないのである。すなわち、み名による言葉とはヤーウエをヤーウエとして示し、イエス・キリストをイエス・キリストとして証しすることなのである。説教が明らかにしなければならぬことは、ヤーウエはヤーウエ以外の何者でもなく、イエス・キリストは現実にイエス・キリストであられるということだ

けでしかないのである。み名による言葉が、み名を確かなものにする。新しい名を発明する必要はない。ただおそらくみ名が何を意味するかは、新しく言われなければならないであろう。それゆえに説教することは単純であるとともに複雑であり、きわめて容易であるとともに、きわめて困難なのである。

このみ名の翻訳不能ということの中に、これが概念化され得ないということが含まれている。それゆえに、先に引用したミスコッチの文章は、その第二の部分との関連でも強調されなければならない。——そして更に、み名による説教の正当化ということ、み名による言葉ないし、ヤーウエについての言葉という概念から生じるもうひとつの帰結を引き出してみたいと思う。「ヤーウエは翻訳不能の名であり、概念化できぬ概念なのである」。ヤーウエの異質性は、この概念化不能ということにある。ヤーウエは人間の把握を逃れ、秘義であり続けられる。み名が名として捕らえられる時、それは異質の言葉であることを明らかにする。ある古い言語（ヘブル語）がみ名を将来のものと呼んだ⁽²⁹⁾。そしてそのことによって時間が始まった。み名において異質なもののうちでも最も異質的な方が近づいてこられるべきなのである。それも、まさしくその近さにおいて異質であり続けられるためである。み名と人格との一体性において、ヤーウエはわれわれにとって異質な方となり、異質なままでおられるので、ヤーウエは「異化作用」なるもの——この概念は、あとでもう一度言及するであろう——を全く必要とはされないものである。もっとも、この自身とする異化作用 *eine Selbst-Verfremdung* は別である。この自身とする異化作用こそ、審きであり、秘義である。

「見よ、主の名は遠い所から燃える怒りと、立ちあがる濃い煙をもつて来る。そのくちびるは憤りで満ち、その舌は焼きつくす火のごとく、その息はあふれて首にまで達する流れのようであって、滅びのふるいをもつてもろもろの国をふるい、また惑わす手綱をもろもろの民のあごにつけるために来る」（イザヤ書三〇・二七以下）。

説教がヤーウエについての言葉であることを断念する時、説教に内在化している異化作用も捨てられてしまう。ヤーウエについての言葉であることを断念する時、説教は、もはや審きを理解せず、十字架につけられた方であるキリストをも、もはや理解しない。十字架ほどに異化作用をするものはないのである。それは置きであり、愚かである（第一コリント一・二三参照）。異質的なもの、異化を起こさしめるもの、それは、これらの名が意味するものの中にある。この名が意味するものが、力を告げ、力を把握し、力を行使する。そこで、この異質性の特質は力にあるということが出来る。異質の言葉がその異質性を得てくるのは、その言葉に帰せしめられる權威によるのである。そこでシエム「名を意味するヘブル語」は、旧約聖書においてはヒュポスターシス（本質）として現われることがありうる。ヤーウエがその意志を貫徹するためにみ手にされる権力手段として現われるのである。「ヤーウエは、そのみ名によって、名を通じて、力ある存在として働かれる」（ピーテンハルト、前掲書四三ページ）。それゆえに詩篇詩人はこう祈り願う。「おお神よ、み名によってわたしを救ってください」（詩篇五四・三、なお八九・二五参照）。

新約聖書においてはイエスの名と力とが並行して用いられる「ナザレ人イエス・キリストの名によって——歩きなさい」（使徒三・六）。使徒ペテロは、金銭を与える能力に、み名の能力を対置させている。「イエスのみ名は、ただちにイエスの臨在そのものである」（ピーテンハルト、前掲書五〇ページ）。み名がその力を受けるのは、説教による。「名は力の働く場である」（ローゼンシュトック・ヒュッシー）。名が説教を正当化するのには、説教の根拠と関わりを持たせるといふ意味においてはばかりではなく、説教の効果を保証するものとしてもそうなのである。み名の持つ力が、説教の力を作る。他方説教者は、押しやられ、押し流されたこの「力の場」を正しく直し、純化することによって、——神に定められた相互関係（相互関係、第四章第Ⅱ節参照）の原則に従って——

説教の力のために奉仕する。説教者はヤーウエをヤーウエとして、イエスをイエスとして主張することによって、み名の力に仕え、み名が覆い隠されたり、押しやられたりすることからこれを解放しようとするのである。そのようにして、説教者はみ名の自己異質化の働きに仕える。呼ばれる方がそのみ名のうちにいまし、力を用いられるという、この異質的な、驚くべきことに仕えるのである。み名こそがここで働くのである。

この「み名における臨在と力」とを、わたしは奇跡(第一章参照)と呼びたいのであるが、これは、その人間の側面からすると、技巧、あるいは場合によっては、技術と呼ぶべきものの局面を持っている。もっとも、そこにおいても、この技巧また技術が神律的であり続けることにいっさいがかかっている。それが自律的になれば、偶像礼拝的なものとなる。——神律的ということがここで意味することは、呼ばれることによって、服従することによって、み名が呼ばれなければならないということである。み名は決して勝手気ままに扱いうるものではない。それは期待となるのである(詩篇五二・一一参照)。み名を呼ぶ技巧・技術が形成されるのは、み名を恐れることによる。そして更に、——このことがすでに述べられて来たことに追加されなければならないのであるが——み名についての喜びにもよる。み名が開示する救い(使徒四・一二参照)に対応するのは、喜びなのである。

恐れと喜びがみ名の賛美に仕えるのである。み名による言葉は、賛美の言葉である。み名による言葉は、み名を歌うのである。ほめ賛美なのである。み名にふさわしい場所をととのえるのである。もとよりみ名を正当化することとはできない。それはみ名そのものがすでにしなければならぬ。しかし、その正当性の証言とすることとはできる。み名の賛美を歌うことによって、これを「きわだたせる」ことはできるのである。——自律的ではなく、神律的に理解する時、このことが意味することは、み名による言葉が、み名をして無力なるものから力あるものへと力を変える道備えをなし、このみ名こそ承認されるべきものであることを指し示すことによって、これに仕えるということである。賛美において、この力の変化を告げ、み名は出来事となるのである。説教の様式

にとつてこのことが意味することは、み名の働く力の場を、あまりに多くの言葉で塞いでしまうならば、み名を賛えることにはならないということである。

「み名をきわだたせる」とは、しかし、いかなることを意味するのであろうか。現実には、み名の異質性が平板化によって覆われ、その力が無力に置きかえられ、み名はその力を持たず、その翻訳不能ということは、陳腐な言葉となってしまっている。そのようなところで、み名をみ名において捕らえるに役立ちうるのは、いかなる技巧、いかなる技術であるのか。

ここで更に歩みを進ましめるものは、文学から学びうるふたつの概念との対決である。わたしは思う。その第一は、すでに導入した「異化作用」の概念である。

ペルトールト・ブレヒトの理論に従うと、あまりにも周知のことであるが、意識されざるものが知覚されるに至るのは、それがわたしにとって異質的なものとして意識されることによるのである。「異化効果は次の点において成り立つ。理解される事物、注目されるべき事物は、習慣となり、熟知しており、直接そこに存在している事物から、特別な、人目をひく、思いもかけぬ事物に変えられるのである。自明なるものが、ある種の方法で不可能なものとなる。だがそれが起こるのは、より理解されるためなのである。周知のものが、認識されたものになりうるのは、それがもはや人目をひかなくなっている状態から引き出されなければならない。当該の事物は説明の必要のないものというように従来の考え方は断絶されなければならない。それがどこにでもいくらもあり、ささやかな、誰もが知っているものであったとしても、今は、異常なものとの烙印を押されるのである」(全集第一五巻、三五五ページ。なおハンス・ディーター・バステイアン『異化作用と宣教』神学の実存双書第二二七号。Hans-Dieter Bastian, Verfindung und Verkündigung, ThEx 117, 1965年を参照のこと)。

この概念を単純に舞台芸術の技巧から説教の技巧へと移すことはできない。なぜならば、神は、「理解される